

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と その成果及び課題の分析

Practice of support activities for children in "aged housing complex"
and its result and problem analysis

坂本 毅啓

Takeharu SAKAMOTO

要 旨

2016年から始まった、大学生による夏休み期間中の子どもの居場所づくり活動について、活動した記録を基にどのような取り組みをしたのかを紹介した。2年目と3年目に実施した保護者アンケートの結果から、この活動が子ども達に成長をもたらし、保護者からは好評を得ることができたことがわかった。北九州市の地域共生社会の実現に照らし合わせて活動の成果を示すと共に、新たに見えてきた地域の課題について指摘した。

<キーワード>: 高齢化団地、子ども、居場所づくり、地域福祉、地域共生社会

1. はじめに

一般的に、「高齢化団地」というのは、高齢者が多く、福祉ニーズについても高齢者を対象とした支援のあり方を検討することが多いように思われる。実際、先行研究レビューを試みても、高齢化団地に対して多様な学問領域からアプローチされた研究を概観すると、その多くは高齢者支援に関するものである。実際、筆者も「高齢化団地」を対象としたアクションリサーチのような研究に関わらせていただいております、これまでに坂本（2017）、坂本・石坂（2017）、坂本（2018）、坂本・石坂（2018）、坂本・宮島（2019）と発表をさせていただいた。これらの一連の拙論は、本論でも扱う同一のA団地であるが、経年的に関わらせていただく中で分かったことは、「高齢化団地」にある福祉的課題は、高齢者を対象としたものだけではなく、むしろ多様な世代における多様な福祉ニーズが存在しているということであった。

本論では、「高齢化団地」においても子どもの福祉ニーズは存在しており、多世代型の支援活動を通して、社会的包摂を志向した地域づくりの実践と今後の課題について述べることにする。その具体的な実践活動として、高齢化が進んだA団地内において夏休み中の子

どもの居場所づくりとして北九州市立大学地域創生学群地域福祉コースの学生（以下、「学生」）が、2016年8月から取り組んでいる通称「ATB活動」について、2018年までの3年間の活動内容とその成果について述べた上で、見えてきた新たな地域の課題について述べることにする。

2. 高齢化団地の概要と福祉ニーズ

2.1 高齢化団地において子ども支援活動へ取り組む経緯

学生がA団地の自治会のお手伝いをさせていただくこととなったのは、2011年からである。当初は独居高齢者への安全見守り訪問活動のみを行った。2015年頃には、A団地管理運営者に学生の活動へ関心を持っていただき、協働して地域活動を行うようになり、団地住民への福祉ニーズ調査の実施や、活動に取り組んでいる学生をマスコミに紹介して頂くなど、連携して活動を行うようになった。2016年の春頃、A団地管理運営者から「夏休み中の欠食児童対策をしてもらえないか」という相談が筆者へなされた。当初、私は「高齢化した団地に欠食児童なんているのか？」と懐疑的であったが、管理運営者側からは「学校給食が止まる夏休み中に、充分にご飯を食べることができない子どもが団地内を徘徊している。痩せていくことが目に見えて分かる。何とかしたい」と説明を受けた。

このA団地管理運営者からの提案に則って、学生から団地自治会へ「子ども食堂をしたい」と提案を行った。しかし、当初、団地自治会側からは「そんな子どもはいない」や「それよりも高齢者への支援を何か考えて欲しい」と言われた。それを受けてもなお、学生は熱心に企画を提案した結果、「団地内の子ども会が休眠状態であるため、会員獲得を名目に行ってみよう」となった。また、「子ども食堂という言葉はこの地域に悪いイメージが着くので使わないでもらいたい」という指摘を受けて、「小学生が大学生と一緒に勉強して、遊んで、そして無料でご飯が食べられる場所」を設けようということになり、2016年8月から、夏休み期間中の子どもの居場所づくりが始まることとなった。

なお、活動の名称については、2016年度は上記の様な経緯もあったために「子ども食堂」とは表現せず、「大学生と遊ぼう」といったようなスローガンのみとし、特に定めた名称を用いていなかった。「ATB活動」という名称は2017年度以降である。

2.2 団地の概要

高齢化したA団地内において子どものへの支援活動を行うようになった経緯について述

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析

べたところで、ここからはA団地の概要について整理しておく。その上で、高齢化した団地にも子育て世帯は存在しており、子どもに関する福祉ニーズは一定数あることを示し、一般的に抱かれる「高齢化した団地」における地域福祉活動だけではなく、多様な世代に視野を広げて考えていく必要性について示すこととする。

A団地は、北九州市内にある、約2300戸の集合住宅が集まった団地である。1960年代頃から建設が始まり、早い段階から団地自治会が設立され、すでに50年を超えている。A団地に居住している人口、世帯数及び平均世帯人数は図1の通りである。ここ30年間の推移で見ると、世帯数についてはそれほど大きな変化は見られないものの、人口は約2500人ほど減少し、平均世帯人数も1.65人となり、独居世帯が多くなってきていることが推察される。A団地における高齢化率は、2018年9月末時点で41.6%、75歳以上の割合は20.3%である。団地内の人口減少と共に、高齢化が進んできている。

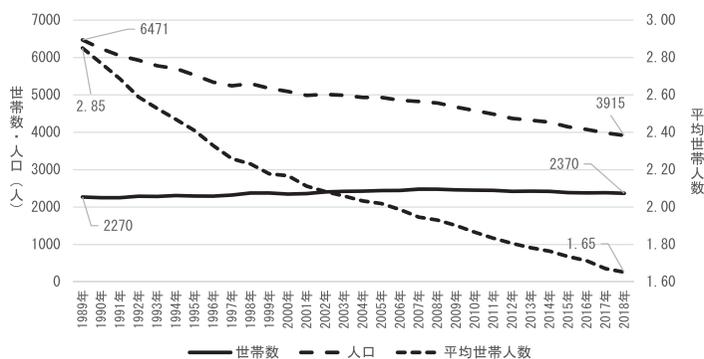


図1 世帯数、人口、平均世帯人数の推移 (1989年～2018年)

資料：「北九州市の人口（町別）」を基に筆者作成。

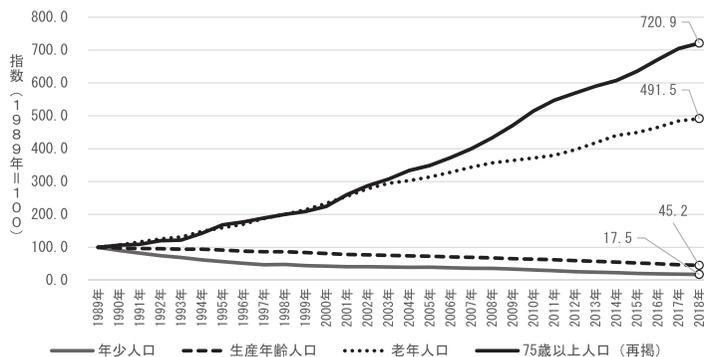


図2 1989年を100とした年齢別人口の推移 (1989～2018年)

資料：前掲資料を基に筆者作成。

A団地に高齢化の推移について、もう少し見てみる。図2は、年齢別人口が30年間でどのように推移したのかを、1989年を100として指数で表現したものである。これからも明らかのように、65歳以上の老年人口は約5倍に増加しており、特に75歳以上については7倍を超えて増加している。それに対して、15歳以上65歳未満の生産年齢人口は半数以下の45.2まで減少している。さらに、15歳未満の年少人口については17.5と、約5.7分の1へと縮小している。以上のように、A団地においては居住者の中で高齢者の占める割合が高くなってきている、いわゆる「高齢化団地」と言える。

2.2 高齢化団地における子どもの領域の福祉ニーズ

高齢化が進化したA団地における高齢者の福祉ニーズへの対応については、既に坂本・石坂(2017)及び坂本・石坂(2018)において明らかにしてきた。その際に分析に用いたのは、A団地管理運営者と北九州市立大学地域創生学群地域福祉コース学生、そして坂本が共同で実施した団地住民に対する医療・福祉ニーズに関する調査である。この調査データを用いて分析を進めると、高齢者だけではなく、子育て世帯において福祉ニーズがあることが分かった。

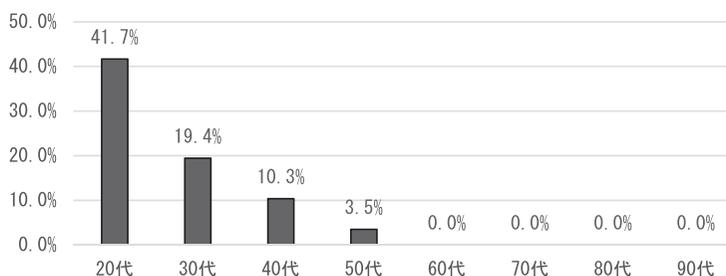


図3 年齢層別に見た「子どもを一時的に預けられるサービス・スペースを利用したい」割合 (N=775)

図3は、年齢層別に「子どもを一次的に預けられるサービス・スペースを利用したい」と回答した割合を示したものである。これによれば、子育て世代と考えられる20代から40代にかけて利用したいという回答があった。特に小さい子どもを育てていると考えられる20代では41.7%と高い割合であった。

表1は、同じく年齢層別に「子どもの預かりサービス」について「有料でも利用したい」、「無料ならしてほしい」、「不要」の3つに分けて示したものである。やはり20代から40代にかけて、利用したいというニーズが有料、無料ともにあることが分かる。

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析

表1 子どもの預かりサービスの利用についての考え (N=774)

年齢層	有料でも利用したい	無料ならしてほしい	不要
20代	25.0%	25.0%	50.0%
30代	16.7%	13.9%	69.4%
40代	11.5%	8.0%	80.5%
50代	3.5%	3.5%	93.0%
60代	1.9%	0.5%	97.6%
70代	0.5%	1.4%	98.2%
80代	0.0%	0.0%	100.0%
90代	0.0%	0.0%	100.0%
合計	3.5%	2.8%	93.7%

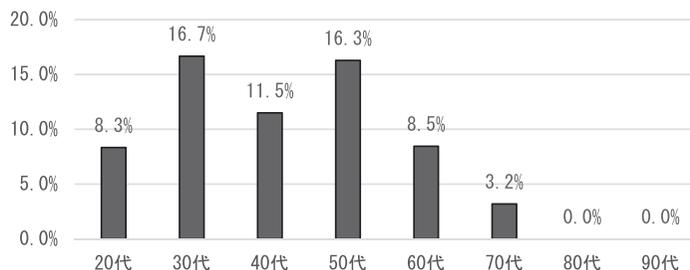


図4 年齢層別に見た「子ども自身や子どもを育てている親を支援する活動に興味がある・実際に取り組んでいる」割合 (N=775)

図4は、年齢層別に「子ども自身や子どもを育てている親を支援する活動」をボランティアとして「興味がある・実際に取り組んでいる」と回答した割合を示したものである。ここでは30代と50代において16%を超える回答をしている。8%から16%の割合で子どもを支援するようなボランティア活動に関心があることがわかる。

ここまで見てきたように、統計的に高齢化が進化した団地にあっても、子どもの数が昔よりは減少したとは言え、A団地内には子育て世帯が居住しており、子どもの預かりサービスへの希望や、子どもを支援するボランティア活動への関心は一定ある。つまり、高齢化した団地であっても、子どもの福祉ニーズはあると言える。

3. 実践内容

3.1 2016年度 (1年目)

高齢化した団地であっても子どもへの支援活動は必要であることを示した上で、ここか

らは年度ごとにどのような活動を行ったのか、活動記録を基に紹介する。なお、2016年度については活動初年度ということもあり「まず活動をやってみる」に重きを置いたため、翌年度以降のような細かい活動記録が残っておらず、写真や坂本（2017）で書いた内容、そして学生の手帳の記録等を基に再構成を行った。

2016年度は6月頃から、1年生が中心となって団地自治会へ赴き、活動内容の提案を行い、企画の実現を進めて行った。費用については、団地自治会の子どもの会の会員勧誘のためという名目を立てて、自治会が行うバザーなどの売り上げ金を基に財源とすることとし、参加費は無料とした。実施場所については、団地自治会の事務所の入っている団地内集会所とし、その中の調理室、洋室、和室を団地管理運営者の協力のもと使用することとした。

7月には参加募集チラシを作成し、A団地が校区に含まれる小学校の協力の下、各家庭へ配布された。定員はだいたい20名ほどとし、学生ボランティアも10名から15名程度で実施することとした。なお、高大連携事業の一環として高校生3名も加わっている。

2016年度の実施日程と食事メニューについては、表2の通りである。初年度ということで、学生の学期末試験終了後、かつ帰省シーズンのお盆を外すということから8月19日から30日までの計4回とした。なお、残念ながらこの年度の参加児童数、ボランティア数については記録が残っておらず、正確なものをここに記すことができない。学生によれば、子どもは毎回概ね15名から20名程度の参加であったとのことであった。

表2 2016年度の活動日程と食事メニュー

日付	メニュー
8月19日	カレーライス
8月23日	三色ご飯、豚汁
8月25日	手打ちうどん
8月30日	そうめん流し

2016年度実施の活動の様子については、写真1から6の通りである。

1日の流れとしては、9時に学生が集合し、打ち合わせ、準備に取りかかった。だいたい9時半頃から子どもたちが会場にやって来た。午前中は夏休みの宿題に取組み、お昼に学生が作った食事を一緒に食べた。そして午後は企画した外遊びや中遊びを行い、15時には解散した（写真2参照）。その後、学生は片付けを行い、反省会を行い、16時には会場を後にした。

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析



写真1 活動時の案内看板

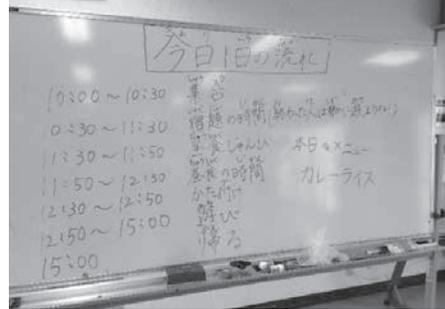


写真2 1日の流れ



写真3 一緒に食べる昼食



写真4 午後の外遊び



写真5 中遊び



写真6 中遊び

資料：写真3と4は学生提供。それ以外は筆者撮影。

3.2 2017年度（2年目）

活動2年目となった2017年度は、「まずはやってみた」前年度の経験を踏まえて、プロジェクトマネジメントの手法を意識しながら実施することとした。その理由の一つには、「北九州市立大学 平成29年度特別研究推進費」において、「北九州地域における社会的包摂を

志向したコミュニティワーク実践に関する実証的研究」というテーマで採択されたことにより、教育実践研究活動として位置付けし直したという側面もある。そのため、1年目の反省に立って、活動の記録化にもこだわった。

活動面では、まず名称として「ATB活動」という名称が付けられた。これは団地自治会役員の方に命名していただいた。「A=遊ぶよう」、「T=食べよう」、「B=勉強しよう」の頭文字を取ったものであり、語感としても活躍しているアイドルの名称と似ていることから、早々にこの名称が使われるようになった。

活動の準備では、前年に中心的に取り組んだ学生も2年生となり、活動方針を立て、積極的に活動準備に取り組み始めた。6月頃から企画準備も進めていき、2年生と1年生が一緒になって準備を進めていった。活動の財源については、前年と同様に団地自治会が開催しているバザーの売上金から出していただくとともに、参加費は無料とした。7月には、小学校にご協力をいただいて募集チラシを各家庭に配布した（図5参照）。

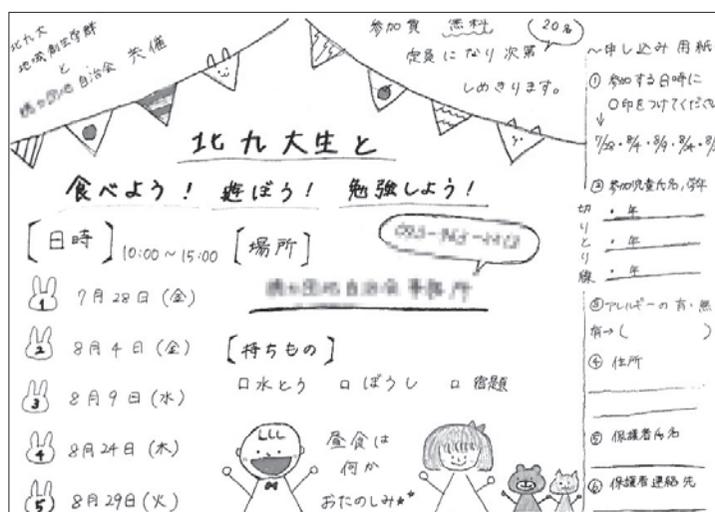


図5 学生が作成した募集チラシ

2017年度の実施日程については表3のように、前年度の反省から、夏休みの始めの方から学生の試験日程とも調整しながら実施し、お盆の間の休みを挟んで合計5回実施した。参加した児童の人数は延114名で1回の平均は22.8人、学生ボランティアの人数は延102名で1回の平均は20.4人であった。リーダー役、調理役などを除くと、児童2人につき概ね学生1名が担当することとなった。

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析

表3 2017年度の活動日程と内容等の一覧

日付	メニュー	企画等	参加児童数	ボランティア数
7月28日	カレーライス	フルーツバスケット、 ジェスチャーゲーム	23	21
8月4日	具だくさんぶっかけうどん、 混ぜ込みおにぎり	しっぽ取り、風船バレー	25	17
8月9日	チャーハン、わかめスープ	イントロクイズ	27	21
8月24日	お好み焼き	映写会、トランプゲーム	16	20
8月29日	そうめん流し	クッブ（スポーツ）	23	23
延数			114	102

表4 8月4日の活動内容

時間	内容	時間	内容
9:00	集合	12:30～	昼食片付け
9:30	打ち合わせ	13:00～14:00	全体遊び（しっぽ取り）
9:30～	受付・アンケート・出迎え	14:00～14:45	自由遊び
10:00～10:15	朝の会	14:50～15:00	帰りの会・子ども解散
10:15～11:30	宿題	15:00～15:45	片付け・ミーティング・学生解散
11:30～12:00	食事準備		
12:00～12:30	昼食		

2017年度からは活動の記録化を掲げていたこともあり、毎回活動後に「ATB実施記録」を学生が作成した。参加児童数、参加学生数、当日のリーダー、1日の流れ、子ども達の様子、気づき、活動のふりかえり、教員指摘事項等を記録し、主担指導教員（筆者）へ提出することとした。表4は5日間の実施記録から抜粋した8月4日の活動内容である。あくまで一例として示したが、基本的に毎回同様な流れで行った。

写真7から16は、活動の様子を記録したものである。写真16は全日程終了後、小学校の2学期が始まってから、小学校の協力のもと、参加児童の保護者宛に送ったお礼状である。また、図6は、参加した児童が後日、団地自治会事務所へ届けてくれた手紙である。



写真7 午前中の学習



写真8 書道の宿題への取り組み



写真9 学生による調理



写真10 一緒に食べる昼食



写真11 カレーライス



写真12 三色ご飯と豚汁



写真13 午後の企画



写真14 一緒にオセロ

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析



写真15 3時のおやつ



写真16 保護者へのお礼状

資料：写真7、9、10は筆者撮影。それ以外は学生提供。

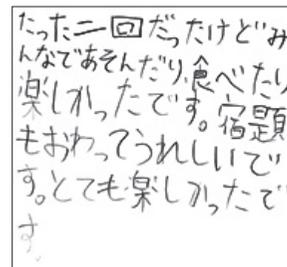
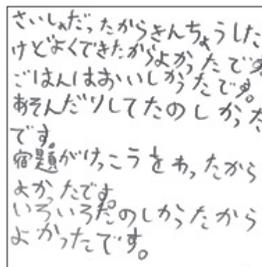
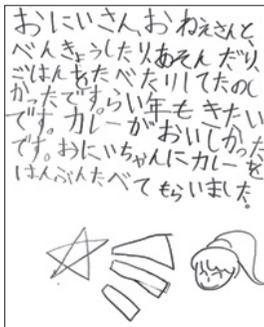


図6 参加した子どもから終了後に届いた感想文

先に述べた保護者へのお礼状と一緒に、保護者アンケートを配布した。これは、活動の成果を評価するためと、次年度に向けた課題点を洗い出すことを目的としたものである。25部配布し、14部の郵送回収であった（回収率56%）。質問内容は以下のとおりである。

- ① ATBにお子様を参加させようと思った理由について教えてください。
- ② ATBにお子様を参加させてみた、保護者としての感想を教えてください。
- ③ ATBに参加したお子様の感想を教えてください。
- ④ ATBへの参加を通して、お子様の成長や変化を感じるようなことがありましたら、教えてください。
- ⑤ 来年度の実施に向けて、ご要望をご自由にご記入ください。今後の活動の参考とさせていただきます。

このアンケートの結果、子どもを参加させようと思った主な理由としては「夏休みの思い出になると思ったから」や、「ふれ合う機会のない大学生の方たちとの交流」への期待、そして「両親共に働いているので、長い夏休みをさみしく過ごして欲しくなかった」の3点を挙げるができる。特に共働きを理由とする回答が4名からあったことから、夏休み期間中、子どもだけで自宅で過ごしている状態が課題となっていることが分かった。

保護者としての感想としては、概ね良かったという意見が多かった。「昼ごはんを用意していただけるのが、うれしかった」や「勉強も一緒にやってもらえて本当に助かりました」という意見は、ATB活動が子育て支援へつながることができた一つの成果であると言える。また「自分の将来を語りだしました」や「自分で考えて、行動するようになった」、あるいは「夕食のお手伝いを率先してやってくれました」という子どもの成長も見られたとの意見もあった。

次年度に向けた改善点としては、「宿題だけでなく、ドリルのようなものも持って行ってOKにしてほしい。」や「スポーツができれば」という内容に関する提案が見られた。また「参加した日の内容が親にもわかると良いと思いました。」という意見も見られ、活動期間中も、子どもを通して保護者とのどのように関われば良いのかを検討することも重要である。そして、「来年も続けて頂きたいです」という意見が多く見られ、無料であるという点があるとは言え、活動自体に大きな手応えをアンケート結果から感じる事ができた。

3.3 2018年度（3年目）

これまで2年分の活動実績を踏まえて、3年目の活動では①活動費用を自主財源とする、②外部の社会資源と連携し支援を得る、③活動日数を増やす、の3つの方針を掲げた。5月のゴールデンウィーク明けから準備を始め、2年生の中から全体リーダーを選び、各活動日のリーダーを1年生から選んだ。その後、企画会議を繰り返しながら準備を進め、団地自治会とも調整を行った。

1つ目の方針の活動費用の自主財源化については、7月に団地内で行われた夏祭りに1〜2年生で模擬店を出店し、その売り上げをまず確保した。それ以外に、大学周辺や団地周辺の商店や企業を回ってプレゼンテーションを行い、ATB活動へ賛同して下さる方々から合計65,000円の協賛金を頂戴し、これを財源とした。2つ目の方針である外部の社会資源との連携については、商店や企業から協賛金を頂戴することもここに含まれるが、それ以外にも特定非営利活動法人フードバンク北九州ライフアゲインからは食材の提供、モノレー

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析

ルを運営している北九州高速鉄道株式会社からは社会見学の提供をしていただいた。3つ目の活動日数を増やすことについては、前年までの保護者アンケート結果等を参考にしながら検討を行い、1回増やして合計6回とした。これら3つの方針にしたがって準備を進め、7月上旬には図7の募集チラシを、例年通り小学校の協力によって各家庭に配布を行い、団地自治会事務所にて申込み受付を行った。



図7 学生が作成した募集チラシ



図8 学生が作成した参加者へ配布した連絡事項

表5 2018年度の活動日程と内容等の一覧

日付	メニュー	企画等	参加児童数	ボランティア数	高校生ボランティア ※内数	備考欄
8月6日	カレーライス、 果物ゼリー	映画会、平和学習	31	24		
8月8日	お好み焼き	缶けり、 ジェスチャーゲーム	26	25		
8月10日	オムライス	フルーツバスケット	26	22	2	市内高校生
8月17日	おからハンバーグ、 ポテトサラダ	ミッションゲーム、 食育	21	27	2	市内高校生
8月20日	お弁当	モノレール基地見学、 外遊び	23	33	10	市内高校生
8月24日	流しそうめん	伝言ゲーム、 絵の伝言ゲーム、 修了式	23	22		
延人数			150	153	14	

活動日程とその内容、参加児童数などについては、表5の通りである。前年度の評判も広まっているとのことから、平均すると1日あたり25名の児童の参加が見られた。これは前年度より約2名多いこととなる。特に初日は当初定員とした20名を大幅に超えていたが、

ATB活動を始めるに至った経緯も踏まえて全員を受け入れることとした。また、3回目からはフードバンクからの紹介で市内の高校生がボランティアとして参加し、5回目の8月20日のモノレール基地への社会見学（写真26～30参照）では、多くのボランティアが必要であるということに出来るべく10名の参加があった。



写真17 午前の学習時間



写真18 書道の宿題への取り組み



写真19 公園遊び

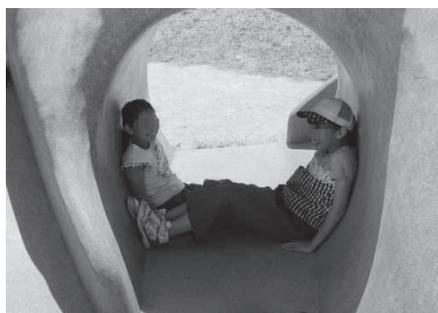


写真20 公園遊び



写真21 公園遊び



写真22 食育の実施（カレーライス）

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析



写真23 オムライス



写真24 ハンバーグ



写真25 フードバンク提供のおやつ



写真26 モノレール基地への移動



写真27 モノレール基地見学



写真28 モノレール基地見学



写真29 モノレール基地でのランチ



写真30 ランチ用のお弁当

資料：写真29と30は筆者撮影。それ以外は学生提供。

2018年度の活動の様子については、写真17から写真30のとおりである。フードバンク北九州ライフアゲインからは、食材の提供（写真25はその一部）にあたって子ども達へ食育を実施することを提案されたため、毎回昼食前にはその時のメニューなどに関する食育を、1年生が中心となって準備をして実施した（写真22参照）。



図9 学生が作成した保護者向けのお礼状

2018年度も前年度と同様に、小学校の2学期が始まった10月に、小学校の協力のもと保護者向けのお礼状（図9）と質問項目が前年と同じ内容のアンケートの配布を行った。アンケートは25部配布し、17部が郵送によって回収された（回収率68.0%）。

アンケートの結果を見てみると、まず、昨年度から引き続き参加した子どもは平均参加回数が5.56回に対して、はじめて参加した子どもは3.75回と少なかった。実際に「3回の参加でした。他の日も行けばよかったと言っていました。」や「3日しか行かせてなかったのをとても後悔しました。」という意見が見られ、参加した子ども達の満足度が表れていると言える。初めての参加の場合、どうしても全てを申し込むというのは難しいかもしれない点を踏まえると、受け入れに余裕があるのであれば、途中からでも追加申込みができるようにするなどの工夫も検討する余地があると思われる。

次年度への要望としては、次年度も継続してほしい意見が多く見られた。一方で前年度と異なり「北九大キャンパス見学なども面白いと思います。学食があいていれば学食利用

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と
その成果及び課題の分析

など。」や「(動物園とか)外に遊びに行きたい。」などの具体的な提案や、「協力できることがあれば、言って欲しいです。」といった保護者による活動に対する積極的参画の意見が見られた点が特徴的である。継続的に実施することにより、利用者であるだけでなく提供側へと意識が広がってきているのは、一つの成果であったと言える。

4. 活動の成果と見えてきた地域の課題

4.1 北九州市地域福祉計画から考える活動の成果

2016年から始まったATB活動の記録を整理してきたが、これらから見えてきた活動の成果について、ここでは北九州市の地域福祉計画に沿って考えてみたい。『北九州市の地域福祉 2011～2020 中間見直し強化プラン』(2017年6月)によると、第2章の「地域福祉を取り巻く環境の変化」では、環境の変化に応じた地域福祉計画の見直しの視点として「自助と互助の強化」及び「地域共生社会の実現」を指摘している。「自助と互助の強化」では「地域内で人材を育成し活用する仕組みやお金が循環する仕組み」が求められていると述べている(P.9)。「地域共生社会の実現」では「すべての人が役割を持ち、お互いを助け合うとともに、地域全体で子どもや若者を支援し、次世代を担う人材を育てていくこと、つまり『共に感じ、共に考え、共に癒やし、共に育てる』地域づくり」が求められており、「この新たな地域づくりのためには、あらゆる人が地域を元気・幸せにする活動に気軽に楽しく参加できる環境、寄附や募金、企業の協賛など活動の資源を調達する仕組み、困っている人や家族を早く発見し、そのニーズに丸ごと応じる分野横断的で総合的な支援ネットワーク、多様な主体による多様な支援・サービスの創出、それらを可能にする人材育成のあり方を、お互いの顔の見える範囲から市域全域まで重層的にデザインしていくことが求められています。」としている(P.9)。

このような視点を踏まえ、第4章では「充実・強化すべき13の方向性」を掲げている。この中で子どもの支援に関わるような内容に着目すると、「方向性2：交流の促進」の「②多世代交流の場づくり」の一例として子ども食堂の推進を掲げている(P.17)。さらに「方向性4：ボランティア・互助活動の促進」では「④活動経費を賄う仕組みづくり」として「互助活動やボランティア活動に必要な経費を賄うために、地域住民や地域に立地する企業等に寄附や募金を促す仕組みのあり方を検討する。」ことを掲げている(P.18)。また同じく「方向性4」において「⑤学生等の参加促進」として「地域と高校・大学・専門学校等が協働し、学習の一環として地域の保健福祉活動に学生等が参加する仕組みを充実させるため、地域

と学校等が情報共有できる場をつくる。」ことを掲げている (P.18)。

これらの項目について、ATB活動では一定の成果を出していると言える。保護者の積極的参画につながるような意見や姿勢は、「自助と互助の強化」につながるものである。また「活動経費を賄う仕組みづくり」では、独自のルートによって企業等からの協賛を得たが、活動終了後に学生が御礼回りをした際に「協賛を出して良かった」という意見が聞かれた点からも、「寄附や募金を促す」意識を形成することに寄与したと言えるだろう。そしてATB活動の主体は学生である。これはまさしく「学生等の参加促進」であり、ATB活動という場において高校生にも参加してもらえることができた。特に子どもを対象とした「楽しい時間」が過ごせる活動は、最初に取り組むボランティア活動としては適している。このような活動を入り口として、地域福祉へさらに関心を広げてもらいたいところである。

4.2 新たに見えてきた地域の課題

一方で、地域に潜在していた新たな課題が見えてきた。ATB活動後に実施している保護者アンケートの結果にあった、夏休み期間中に家で過ごしてばかりいる子ども達の存在である。

北九州市内の小学校では、夏休みが始まってすぐの1週間ほどは、午前中だけの「夏の教室」という活動を行っている。このような場は子ども達の生活リズムを維持したり、宿題に取り組む学習習慣の定着という観点のみならず、子ども同士のつながりや遊ぶ約束をする機会でもある。また「夏の教室」以外にも放課後児童クラブが設置されていることにより、両親が就労していることから夏休み期間中の子どもの過ごす場は用意されていることになっている。さらに、北九州市が子育て支援や少子化対策を進めるために策定した「元気発信！子どもプラン(第2次計画)【平成27～31年度】」では、「夏の教室(地域版)の実施」として放課後児童クラブの活用を提起している。これは「放課後児童ヘルパー等地域力の活用や大学との連携などにより、夏季休業日中に小学校で1週間程度実施されている『夏の教室』の地域版を放課後児童クラブで実施し、生活体験やスポーツなど体験の機会を増やすとともに、学習習慣を養います。」という事業である (P.139)。しかし実態としては、少なくともA団地内においては十分に機能している、あるいは十分に利用されているとは残念ながら言いがたい。何故機能しないのか、何故利用しないのかということ、子育て世帯の生活構造に目を向けながら実証的に明らかにすることが今後必要である。

当初、ATB活動を始めることとなった経緯は、団地内に「欠食児童がいる」ということ

「高齢化団地」における子どもへの支援活動の実践と その成果及び課題の分析

であった。しかし、少なくともその存在については、2018年時点では確認されていない。しかし、ATB活動のような無料で昼食まで用意され、宿題や皆で遊んだり、社会体験が可能なサービスを提供する活動は、高齢化したA団地においてこれからも必要である。そしてそれは、北九州市が目指す地域共生社会の実現にも合致する取り組みである。民間企業等には資金面や活動ノウハウへの貢献、市行政にはこのような活動を積極的に取り組めるための環境整備への取り組みを期待したい。北九州市地域福祉計画に「方向性3：地域課題・ビジョン・解決策を共有・検討する仕組みの構築」として「④成功事例の共有」を掲げており、学生が取り組んでいるATB活動もその「成功事例の一つ」として地域に共有されることを期待している。

5. おわりに

本論は、ATB活動という子どもを対象とした学生による活動について、活動記録を基に3年間の活動の歩みを整理した内容であり、活動の成果と新たに見えてきた地域の課題について簡単に述べさせていただいた。これらは活動の機能面に着目して整理された内容であり、社会構造や地域の中で何を担っているのかという視点では十分に論考されていない。これについては、保護者アンケートのデータのテキスト分析を進めながら、改めて別の機会とさせていただきたい。

最後に、本論は半年以上かけて準備から終了後の会計決算、そして協力して下さった方々への御礼回りまでを全てやり遂げた学生達の活動を整理したものである。毎年終わるたびに、「来年はこうする！」と意欲的な姿勢を持ち続けている学生達に心より敬意を示したい。そして、そのような学生達を支援・指導して下さっている団地自治会、活動の現場で学生へ助言・指導して下さった特任教員の大木えりか先生（現在、大阪人間科学大学助教）と同じく特任教員の勅使河原航先生、多くの支援を賜った団地管理運営者及び企業等の関係団体、そして何よりも、学生達を信じて我が子をATB活動へ送り出していただいている保護者の皆様には、この場を借りて心より御礼を申し上げる。誠にありがとうございました。

<参考文献>

- 1) 浅井春夫 『「子どもの貧困」解決への道 ——実践と政策からのアプローチ——』自治体研究者。
- 2) 浅井春夫・中西新太郎・田村智子・山添拓・他14名 (2016) 『子どもの貧困の解決へ』新日本出版。
- 3) 足立己幸・NHK 「子どもたちの食卓」プロジェクト (2000) 『NHKスペシャル 知っていますか？子どもたちの食卓 ——食生活からからだと心がみえる』日本放送出版協会。
- 4) 岩田正美 (2008) 『社会的排除』有斐閣。
- 5) 埋橋孝文・大塩まゆみ・居神浩編著 (2015) 『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅡ ——社会的支援をめぐる政策的アプローチ——』ミネルヴァ書房。
- 6) 埋橋孝文・矢野裕俊編著 (2015) 『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅠ ——理論的アプローチと各国の取組み——』ミネルヴァ書房。
- 7) 加藤彰彦・上間陽子・鎌田佐多子・金城隆一・小田切忠人編著 (2017) 『沖縄子どもの貧困白書』かもがわ出版。
- 8) 鷹咲子 (2013) 『子どもの貧困と教育機会の不平等 ——就学援助・学校給食・母子家庭をめぐる——』明石書店。
- 9) 北九州市子ども家庭局子ども家庭部・子ども家庭政策課 (2014) 『元気発信！子どもプラン【第2次計画】北九州市次世代育成行動計画 北九州市子ども・子育て支援事業計画【平成27～31年度】』
- 10) 北九州市(総務企画局企画課) (2014) 『「元気発信！北九州」プラン 北九州市基本構想・基本計画 改訂版』
- 11) 北九州市 (2017) 『北九州市地域福祉計画 北九州市の地域福祉2011～2020 中間見直し強化プラン 共に感じ・共に考え・共に癒やし・共に育てる地域づくりを目指して ～時代とともに進化する地域福祉の新たな取り組み～』。
- 12) 紀田順一郎 (2000) 『東京の下層社会』筑摩書房。
- 13) 坂本毅啓 (2017) 「高齢化団地住民への調査結果から考える社会福祉制度の課題 ——コミュニティ形成のための財政的支援の重要性——」『大阪保険医雑誌』大阪保険医協会、第45巻第610号、P.38～P.43。
- 14) 坂本毅啓 (2018) 『「高齢化団地」における多世代包摂を志向した地域活動』『関西都市学研究』包摂型社会研究会、第2号、P.69。
- 15) 坂本毅啓・石坂誠 (2017) 「高齢化団地におけるインクルーシブな地域づくりの実践と課題」『地域ケアリング』北隆館、第19巻第6号、P.69～P.72。
- 16) 坂本毅啓・石坂誠 (2018) 「高齢化団地における住民の福祉ニーズに対する地域活動の成果と今後の課題」『いのちとくらし研究所報』特定非営利活動法人非営利・協同総合研究所いのちとくらし、第63号、P.52～P.66。
- 17) 坂本毅啓・志賀信夫 (2018) 「地方都市におけるインクルーシブな地域づくりに関する研究～日向市における子育て世帯の生活・ニーズ調査の二次分析～」大阪市立大学都市研究プラザ編『先端的都市研究拠点2017年度公募型共同研究によるアクションリサーチ』大阪市立大学都市研究プラザ、P.79～P.97
- 18) 坂本毅啓・志賀信夫編 (2017) 『地方都市におけるインクルーシブな地域づくり』大阪市立大学都市研究プラザ。
- 19) 坂本毅啓・宮島優奈 (2019) 「独居高齢者世帯への戸別訪問活動記録の分析から見える成果と課題」『地域ケアリング』北隆館、第21巻第2号、P.56～P.60。
- 20) 志賀信夫 (2016) 『貧困理論の再検討 ——相対的貧困から社会的排除へ——』法律文化社。
- 21) 志賀信夫・畠中亨編 (2016) 『地方都市から子どもの貧困をなくす』旬報社。
- 22) 全泓奎 (2015) 『包摂型社会 ——社会的排除アプローチとその実践——』法律文化社。
- 23) 武川正吾 (2011) 『福祉社会 ——包摂の社会政策——』有斐閣。
- 24) 戸室健作 (2018) 「都道府県別の子どもの貧困率とその要因」社会政策学会編『社会政策』第10巻第2号 通巻第30号、P.40～P.51
- 25) 長谷川裕編著 (2014) 『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難 ——低所得者集住地域の実態調査から——』旬報社。
- 26) 林明子 (2016) 『生活保護世帯の子どものライフストーリー』勁草書房。
- 27) 松本伊智朗・湯澤直美・平湯真人・山野良一・中嶋哲彦編著 (2016) 『子どもの貧困ハンドブック』かもがわ出版。
- 28) 松本伊智朗編著 (2017) 『「子どもの貧困」を問いなおす ——家族・ジェンダーの視点から——』法律文化社。
- 29) 宮武正明 (2014) 『子どもの貧困 ——貧困の連鎖と学習支援——』みらい。
- 30) 湯沢雅彦・宮本みち子 (2008) 『新版 データで読む家族問題』NHK出版。